

夢か幻か、それともまさかの現実か。

これは静岡県内のガソリンスタンド「平野石油」で働く姉妹、平野橙果と萌黄の、不思議な不思議なある一日のおはなし。



「くうーいい天気！ お昼寝したあい」

柔らかな秋の日差しが降り注ぐ中、妹の萌黄がグツと背中を反らして両手を空に伸ばす。肩までの鮮やかな緑色の髪がさらりと風に揺れた。

「もう、萌黄ってば。お仕事だよ」

その背後から、苦笑した姉の橙果が声を掛ける。一つに束ねた長い橙色の髪が、秋の空によく映える。

昼過ぎの、客がたまたま途切れたタイミング。とはいえ、業務時間内であることには変わりない。

萌黄はペロリと舌を出して「はあい」と笑う。

「姉ちゃん、今日って何か急ぎの仕事あったっけ？」

「特に入ってないわね。このまま何もなければ、今日は閉店時間まで平和に……」
橙果がそう答えた、その時だった。

——ドオオオオン！！

周囲に轟音が響く。

「な、なに！？ なになになに！？」

「……農園の方からだわ。何かあったのかしら」

慌てる萌黄とは対照的に、橙果は冷静に音の発生源を探す。橙果の視線の先には、うっすらと黒い煙のようなものが立ちのぼっていた。

ガソリンスタンドの近く、柿農園がある方角だ。

「……姉ちゃん、行ってみよう！」

先程とは打って変わって、萌黄は凛々しい表情で愛車のバイクのもとに走り出し、橙果もすぐにその後を追いかける。

「社長！ 私たち農園の方見てきます！」

二人は社長の返事も聞かないままに、萌黄のバイクに跨った。

「姉ちゃん、行くよ!」

「ええ」

力強いエンジン音とともにシルバーの車体が加速する。シャープな車体の印象そのままに、二人の姿はあっという間に道路の先に消えていった。

「着いた!」

萌黄がバイクをとめると、後ろに乗っていた橙果は慣れた様子でヘルメットを脱ぎ、軽い身のこなしでバイクから降りる。

「……柵が壊れて木が倒れてるわね。なんだか朽ちてるみたい。……まわりの草も黒くなってる」

「やっぱりここだったんだ……。じいちゃん大丈夫かな……」

この農園は「次郎柿」という品種の柿を育てており、老齢の男性が一人で経営している。

橙果も萌黄も、幼い頃からとてもよく知っている人物だ。

「……行ってみましょう」

二人の間に緊張感が漂う。何が起こっているのか見当もつかない。

二人は無言のまま顔を見合わせ、同時に駆け出した。

「は……………?」

作業小屋の前に先に辿り着いた萌黄が立ち止まる。

少し遅れて追いついた橙果も、同じように足を止めた。

「こ、これは……」

二人の視線の先にあったもの、それは二人の背丈ほどある巨大な黒い渦だった。

煙のような、雲のような、とにかく、モヤが渦を巻いて丸い形を保っている。

「ね、姉ちゃん、なにこれ」

「何かしら……自然に発生したものには見えないけれど」

二人が会話を交わしていると、その渦が意志を持ったように形を変える。

ズズズ、と音を立てて二人の方向に近付いた。

「ヒッ……………!! 化け物!?!」

萌黄がそう叫ぶと、モヤが燃え上がるように巨大化する。

「バケモノ……………バケモノダト……………!?!」

「うわ! 喋った!!」

低く歪んだ聞き取りにくい声。しかし確かに、そのモヤは言葉を発した。

——ゴオオオオ！！

唸り声のような轟音に、二人は思わず目を閉じる。

身体が吹き飛ばされそうなほどの強い風が吹き抜けた。

おそらく数秒。風と音が止んだのを見計らって、二人は恐る恐る目を開ける。

「……………え」

橙果と萌黄の声が綺麗に揃った。

「ダレガバケモノダ、ダレガバケモノダ！！」

先程とは打って変わって甲高い声。

そこにいたのは、柿だった。

正しく説明するのなら、柿に、手と足が生えた存在。先ほどの巨大な渦が嘘のように、通常サイズの柿から手足が生えた何かが、地面の上で地団駄を踏んでいる。

「……………ええと。柿ね」

「……………柿だね。柿の……………うーん、何こいつ。妖精……………？」

二人があっけにとられている間も、手足の生えた柿は地面の上で一人暴れまわっている。その様子をしばらく眺めていたが、橙果がふと顔を上げると、人が倒れていることに気がついた。

「……………おじいちゃん！！」

倒れているのはこの農園の経営者である男性だ。二人は柿を跨ぎ、彼の元に駆けつける。

声を掛けると、男性はほっと表情を緩めた。

「おお……………橙果……………萌黄……………。突然柿が喋り出したもんだから腰が抜けてな……………。散々柿を育てて食ってきたというのに……………ついにワシのほうに喰われる日が来たのかと……………隣柿はよく客食う柿、か……………」

「しっかりして！　じいちゃんは客じゃないよ！」

「萌黄、そうじゃないわ。おじいちゃん、とにかくどこかで休んで。立てますか？」

二人が手を貸すと、男性は「すまん……………」と呟きながら自力で逃げ出すことに成功した。

平野姉妹と、喋る柿。柿はいかかわらず地面の上で暴れまわり、平野姉妹はしゃがんでその様子を眺めていた。

「それで……………あなたは何者なのかしら……………？」

このままでは埒が明かないと、口を開いたのは橙果だ。
柿はピタリと動きを止めて、二人を見上げる。

まるでハロウインのカボチャのように、柿にはハッキリと目と鼻と口があり、右頬の部分には傷がある。

「……オレノナマエハ……ダーク、カキキング……」

「…………ダーク柿キング……?」

二人の声がピタリと重なる。

「その割には小さいな」

「萌黄!」

「チイサイ……ッ!」

「小さくないわ、大きいわよ」

「姉ちゃん、それもどうなの」

「オオキイ……ナライイ……」

「いいんだ……」

なんとかダーク柿キングの怒りを収め、橙果が少し考えてからできる限り穏やかに問い掛けた。

「ダーク柿キングさんは、ここで何をしているの?」

「……ユルサナイ……ユルサナイ」

「許さない……? 何を許さないの?」

「……ユルサナイ」

「なあ。何を許さないんだよ、ハッキリ言わないとわかんないよ」

萌黄が呆れたようにそう溢すと、ダーク柿キングがキツと萌黄を睨みつける。

「ゼツタイニ!! ユルサナイ!!」

ダーク柿キングの周囲の黒い渦が再び勢いを増す。

それは炎のように立ちのぼり、柿キングが大きく息を吹き出すとともに周囲の木々を包みこんだ。

「わー!! 柿の木が燃えちゃう!! 農園は火気厳禁!!」

萌黄の悲鳴に、柿キングがギギギと睨みつける。

「カキゲンキン……カキ……ゲンキン……!」

「なんで怒ってんの!? とにかく火を消さなきゃ……! ……って、あ、あれ?」

木々に駆け寄った萌黄の目の前で、炎のように見えていた黒いモヤが霧散していく。

「燃え……てない……?」

「火じゃないみたい……でも、息に触れた柿の実や枝が黒く変色してるわ……!」

橙果の言う通り、モヤに触れた柿の実が鮮やかな橙色からすっかり色を変えて朽ちてしまっていた。

「ゼンブ……ゼンブオレトイツシヨニシテヤル……」

「どうしよう姉ちゃん、このままだと柿の実が駄目になっちゃう！」

「……ダーク柿キングさん……！ 話を聞いて！」

「ユルサナイ……ユルサナイ……」

ダーク柿キングは小さな体に巨大な黒い渦を纏ったまま、怒りに満ちた視線を農園の木々たちに向けている。

「……だめね、話が噛み合わない……。萌黄、なんでこんなことになったのか原因を調べる必要があるわ。あなたはダーク柿キングがどこから来たのか、痕跡を追って探ってきて」

「姉ちゃんは？」

「私はここで話を聞き出すわ。ほら、早く！ あなたの相棒に乗ればすぐでしょう？」

「わかった……！ 行ってくる、待ってて姉ちゃん！」

離れたところから萌黄のバイクのエンジン音が響く。その音が遠くなるのを聞きながら、橙果は静かに口を開いた。

「ねえ、ダーク柿キングさん」

「ユルサナイ……」

「何を許さないの？ 何に怒っているの？ 教えてくれたら何か助けになれるかもしれないわ」

じつと他の木々を見つめるダーク柿キングに、橙果は静かに語りかける。

「ゼツタイニユルサナイ、ゼンブ、ゼンブ、ミチヅレニシテヤル」

呟くような小さな声だが、しかし橙果はそれを聞き逃さないように耳を澄ました。

「……道連れ？ それは、他の柿もあなたと同じように、ということかしら」

「……ソウダ、タベラレナクシテヤル。キレイデ……ツヤツヤ……ユルサナイ」

やっと会話が噛み合った。このチャンスを逃さないよう、橙果はしゃがんで視線を合わせ、慎重に言葉を続ける。

「なぜそんなことを思うの？ あなたも美味しい柿だったんじゃないの？」

「……チガウ……チガウ……」

「……よかったら教えてくれないかしら。腹が立ったの？ 悲しかったの？ どうしてあなたはこんなことをしようと思ったの？」

橙果の問いかけに、ダーク柿キングはしばらくの沈黙のあと、ゆらりと悲しげに俯いた。

「……ステラレタ、タベテモラエナカタ……」

先程までの怒りに満ちた声とは一転して、その声音は哀しみに満ちている。

「……残されてしまったということ？」

「マルゴト……。キズ……。アルカラ」

確かに、ダーク柿キングの頬には傷がある。おそらく、柿だった頃からあったものなのだろう。

傷物であれば出荷は出来ない。しかし、この農園は痛んでいるからといって簡単に捨てたりはしないことを橙果は知っていた。

「……傷があるから捨てられてしまったの？」

「……ソウ。……クレイナハコ、イレテクレナカッタ」

「そうなのね……」

うなだれるダーク柿キングに橙果が頷いたところで、遠くから聞き慣れたエンジン音が響いた。その音は徐々に大きくなり、すぐ近くで停止する。

「姉ちゃんん！」

「萌黄！」

大きく手を振る萌黄の姿に、橙果はホッと胸を撫でおろす。

駆けてくる萌黄の後ろから、少し遅れて小学生くらいの女の子が現れた。

「その子は？」

「この近くに住んでるリホちゃん。どう？ がんばれそう？」

萌黄の後ろからひよこりと顔を出したリホは、ダーク柿キングの姿を見てびっくりと体を震わせ、また萌黄の後ろに隠れる。

しかし、意を決したように再度顔を覗かせ、恐る恐る口を開いた。

「……かきさん？」

細く高い声。その声に柿キングがピクリと反応する。

「……！ ステルンダ、イタンデルカラ……！」

「ちがうよ！」

柿キングの言葉に、リホが萌黄の背中から飛び出した。リホは両手を握りしめ、先程よりもずっと強い声で叫ぶ。

「食べるの楽しみにしてたんだよ！」

「このじいちゃんにお裾分けで貰った柿、気付いたらなくなってたんだよ……アタシが痕跡を追っかけてたらこの子の家について、なくなっちゃったって泣いてたんだよ」

「ウソ……ウソダ……」

「ほんとだよ！ この柿剥いてねってお母さんをお願いしてたんだよ！」

「傷があったっておいしい柿だってことは近所の人たちは皆知ってるよ」

リホと萌黄の言葉に柿キングがよろよろと後退る。

「ア……、チガウ……ハコに……ハイレナクテ……、カゴニ、イレラレテ……」

「かごに入れてお裾分けしたのよ。美味しく食べてもらうために。農家のおじいさんも、あなたを大切に育ててくれたでしょう？」

「そうだよ！ 甘くて美味しい柿だったはずだよ！」

「とつてもいい香りでおいしそうだった！ 食べたかったんだよ！」

橙果と萌黄、それからリホの言葉で、ダーク柿キングは何かを思い出したかのように目を見開いた。

「アアア……!!」

その瞬間、ダーク柿キングを強い風と共にモヤが包み込む。

「うわっ!」

渦は急激に大きくなり、橙果と萌黄は、リホを抱え込んで地面に伏せた。

落ちた葉が舞い上がり、木々の枝が大きく揺れる。

激しい風と音が通り抜け、周囲が静まったのを確認してから三人はゆっくりと目を開けた。

「これは……」

三人の視線の先、先程までダーク柿キングがいた場所に、みずみずしい葉をつけた膝丈ほどまでの柿の苗木が生えている。

「次郎柿の苗木、かしら……?」

橙果と萌黄が顔を見合わせる。

何が起こったのかは誰にも説明できないが、ダーク柿キングが消え、さっきまでなかった苗木がここに生まれた。つまりは、きっとそういうことなのだろう。

「きれいな木だねえ」

リホのその素直な言葉に、橙果と萌黄が頷いた。

「おーい!」

「じいちゃん!」

避難したはずの農園の経営者である男性が、大きく手を降ってこちらにやってきた。

「大丈夫なんですか?」

「ああ、元々驚いて腰を抜かしたただけだからな。大きな音がしたから様子を見に来たんだ。

あの柿は……?」

「これ」

萌黄が指さすと、男性はゆっくりと近寄る。

「ほう……。これは……、立派な苗木だ」

指先で葉や枝の様子を確かめる。

「……これは昔話だがな。火災で焼失した柿の根本から新しい芽が出てきて、それを大切に育てたものが次郎柿として愛されるようになった、という話があるらしい。……なんだかその話を思い出すよ」

萌黄が、その様子を少し眺めてから口を開く。

「ねえ、じいちゃん。あの柿、傷物で出荷してもらえなかったんだって。捨てられたって勘違いしちゃったみたい」

「……なんと……。全部、大事に育てた美味しい柿なんだが……。そうか……。綺麗な柿が箱詰めされていくのを、どんな気持ちで見てたんだろうなあ」

男性が「すまんかったなあ」と葉を撫でる姿を見て、橙果がとあることを思いつく。

「ねえ、おじいちゃん、この苗木、もしよかったら」

しかし、橙果が提案するその前に、彼は大きく頷いた。

「ああ、ああ。もちろん預かろう。きつと立派な実をたくさんつけるだろう……。桃栗三年、柿八年。苗木になっているから……。まあ、もう少し早いか。どちらにせよ、わしも長生きせんとなあ」

「頼むよ、じいちゃん！」

「楽しみにしてるね！」

皆の笑い声が、たくさんの柿の実がなる農園に響いた。

「さ、萌黄。お店に戻りましょう。飛び出してきちゃったから社長が困ってるかもしれないわ」

橙果の言葉に、萌黄が「あ」と声を漏らす。

「……そうだった。あーあ、変な一日」

「ふふ、本当ね」

「ま、お仕事がんばりますか」

萌黄が秋の高い高い空に向かって、グツと体を反らして伸びをした。